

2

「知っています」という、持つことに依存する罣

古今東西、教えようと思っているひとから、教わったひとはおりません。

主体は学ぶひとにあり、コミュニケーションは受け手が成立させるのです。

世界一すぐれた先生と言われる、米国の物理学者リチャード・P・ファインマン（1918-1988）は、1965年に量子電磁力学の発展への貢献が認められ、ジュリアン・S・シュウィンガーや朝永振一郎とともにノーベル物理学賞を共同受賞した偉大な科学者です。彼の研究成果はもちろん素晴らしいものですが、彼の教育への姿勢はそれと同等に評価され、世界の教育に大きく貢献した教師を表彰する「グローバルティーチャー賞（Global Teacher Prize）」も与えられています。ファインマンは学問に対して実に誠実であり、独特な教育論を持っていました。常に、学ぶひとたちの視点から教えることを組み立てたひとです。

例えば、カリフォルニア工科大学で行っていた授業では、生徒が問題をもってきて、その場でファインマンがその問題を解くという授業をしています。

ここに、学び・教えるという真理があるとわたしは考えています。

*筆者が展開する日常の未来づくり型のODではこの手法を取り入れています。

*スーパービジョンの本質はここににあります。

ファインマンは、成績優秀でMITに入り、物理を勉強し、教鞭をとりました。そこで、大きなスランプに陥り、鬱々とした日々を過ごします。周囲からの期待を受けて若くして大学教授になったにもかかわらず、思うように業績が上がらず「僕なんてもうダメだ。燃え尽きたロウソクみたいなものだから、もう何をしても大した成果も上げられないだろう」と意気消沈していたのです。それが、あるとき、あるきっかけ（内容は省略）から突然開き直ります。もともと物理が楽しいからやっていたのに、いつの間にか「物理学者とはこうでなければならない」という思い込みに縛られて自由をなくしていたことに気づくのです。その時のことをファインマンはこう回想しています。「以前はやりたいと思う研究をやっていただけで、それが物理の発展のために重要かどうかなど知ったことではないと思っていた。ただ自分が楽しむためにやってきたのだ。だったら、これからも以前のように、自分が楽しむために『アラビアンナイト』を読むように、気の向いた時に、研究の価値など考えずに、ただ物理で遊ぶことにしようと思った」というのです。

ファインマンは、そのような自身の体験から、「学び」の本質をつかみます。「今、ここ」を愉しんで幸福を感じていることが重要で、脳のパフォーマンスが上がるのは、その時にしていることに本人が浸りきり、集中し、愉しんでいる時だということを基軸に学習機会を創作したのです。

ひとの脳は、無我夢中になっているときにフロー状態になっています。そして、「今、ここ」を楽しんでいるひとは、人間関係も上手くいく。このひとのそばにいと何か楽しそうだとひとが近づいてきます。ひとが集まってくることによって、いろいろな情報が入ってきますし、さまざまな観点からアドバイスをもらえるので、仕事もよい方向に向かいやすい。全ては、学ぶ主体者が決めるということです。

だからこそ、教える側は学ぶひとなのです。

それが、操作主義的な教え込みではどう展開されるのでしょうか。専門性の分化と深化によって扱う領域の狭い教える側が、ひとつの方法論を上から目線で教え込もうとする。ひととの関係性も、まずは自分自身が自分と違うひとたちとの関係を愉しむことを原点とせず、関係性をつくろう、いろんなコミュニティに参加しようとデータを持ち寄って説得することが横行します。それは、人間の本質をついたものではないと考えます。

ライフであろうとキャリアであろうと、それを扱うひとそのものが、今ここに生きていて、素敵な表情で、夢中になっているかが問われるのです。

相手の話をきいているふりをして、その実、次はどんな話をしようかと頭の中で画策している教える側のひとは薄っぺらいということであり、わかるひとにはその操作主義がわかってしまいます。どう教えようか、どう伝えようかということは、二の次です。

つまり、研修のファシリテーターも、面談アドバイザーも、講演識者も、自身がその場で夢中に学び、愉しんでいるかという「在り方」が何より大事なことであり、このことは、実はもっとも難しいスタンスといえます。

研修前、面談前に鏡を見てください。いい顔をしていますか。難しいことを考えている表情でなんとなくよしとしていませんか。大きな声のまくしたてで、賢そうに持論を伝えようとしていませんか。

たとえば、よくある事象として、自分より10歳以上も年上の研修受講者、面談者にどう対処しようかという処世術の悩みがあります。「なめられてはいけない」「言うことをきいてもらわなければならない」という気持ちが先行し、それに対して、自分の経歴に箔をつけて認めてもらうという処世術です。これは、誰もが未熟な段階で陥ることですが、要は、素であることが怖いのです。

できるだけ世間的な情報や専門的な情報を集め、情報で相手を説得するという、権威づけで相手を従わそうとする態度です。

そうではなく、今日の出会いは新たな発見が得られる機会であり、相手が違った立場や年齢、価値観のひとだからこそ、自分自身が学べるという心境でのぞむことが大切なのです。

どのような発見があるのかワクワクし、表情は晴れ、一期一会の心境でその瞬間を迎え、その瞬間を夢中に愉しむ、というスタンスを会得することがプロの道ではないでしょうか。

研修や面談の相手が年上であればある程、さまざまな経験、体験、視野・視界を持っているものです。その方々に、眉間にしわを寄せた難しい表情で説得をと考えても相手は見破ります。しかも、賢いひとほど、そのとき何も言いません。

説明や講義の場となればなおさらこのような現象に陥るものです。

全ては自分自身の言動・態度が相手の反応を引き起こしており、それは相手の問題ではなく自分の問題と捉えるべきです。だいいち、いくら情報武装をしても、情報化社会では浅い情報は価値が低いのです（情報社会は浅薄な情報価値がなくなる社会）。

年上の方からは、学ばせてもらう、いや年齢に関係なく相手から学ばせてもらうという真摯な姿勢が相手を惹きつけ、実は相手に影響を与えます。そのスタンスでの対話の上で、適材適所の情報提供がはじめて価値を持つのです。研修ファシリテーターや面談アドバイザーは、「キャリアの理解」「プログラムや面談の理解」とともに「受講者の理解」という基礎を身につけながら、その技術においては、「みる」「きく」「はなす」を熟知、実践できるひとであり、実践にのぞむにあたって「心境を整える」という自分のあり方を磨く必要があると思います。

留意点2

「知っています」という、持つことに依存する畏

なぜ、研修ファシリテーターやキャリアアドバイザーや上司は、中高年齢者に気を使ってしまうのでしょうか。考えてみれば、これは当然なことです。ことキャリアの世界となれば、長く生きてきた方々に対してどう対峙するのかはとても難しい問題なのです。

そこで、よくあるのは、自分はキャリアの専門家であり、その世界では年齢を超えて優位性を発揮することができると思います。上司であれば、自分を棚上げし、会社の方針だからと理由づけします。

この時点で、「関係する」ということから逃げることとなります。ファシリテーター、キャリアアドバイザー、上司のみなさんはどこかでこのような経験をしているはずで、それは、当然引き起こる事象です。

それでは、逆を考えてみましょう。自分よりも年下の方との対峙によって自分が影響を受けた経験です。

極端な話をすれば、自分に近い子供たちから影響を受けた経験です。

おそらく、自分より年下の意見の内容に影響を受けたということより、経験の浅い者の言動の中に、素直な生き方や考え方、真摯さや純粋さや真剣さという、自分が忘れかけている昔の自分をみることができ、そのことに大きく影響を受けているのではないのでしょうか。

つまり、対峙の上下関係を突破するには、ファシリテーターやキャリアアドバイザーの「在り方」（エーリッヒ・フロム）で対峙するしかないのです。それは、専門家としての知識の振りかざしではないということです。表面的なダイバーシティ&インクルージョン（多様性の享受、DEI）というきれいなことばではコミュニケーションは成立しません。コミュニケーションには、各自のさまざまな感情が居座っていて、それが自分自身の中にも確かにあるという共感の接点を持ち得るかどうかということです。

ファイマンとノーベル物理学賞を共同受賞した朝永振一郎は、第二次大戦前の1940年頃、ドイツに留学していて『滞在日記』を書いています。

その日記の中で、「物理学の“自然”というのは自然をたわめた不自然な作り物だ」ということを書いています。

この「物理学」を「心理学」「キャリア学」「社会学」に置き換えても同じことが言えるのではないのでしょうか。

「心理学」「キャリア学」「社会学」が扱う自然の状態とは、機械論的な操作による自然観では決してないはずで、データを持ち寄り、部分的な論でひとを操作する行為は、自然をたわめた不自然で無理のある作り物です。

誤解を恐れずに言えば、企業のHRMや人事制度は、あくまで企業都合のその時流行りの専門性の深化による研究で展開しようとするものです。しかし、精神性の「正常」の定義を専門的に分化すればするほど、多くのひとは正常ではないと定義されがちで、病気と診断されてもおかしくない状況を作り出すことにもなりかねないことを心していなければなりません。人間の本来持っている自然な回復力を信じずに、病と特定することで、回復力が逆に発揮されない現象を生むことも起こります。*もちろん、その症状は専門的に診断、処方されなければなりません。

機械論的な自然観という作り物を心理学・キャリア学・社会学の世界を経由して、それからまた自然に戻るのが学問の本質そのものだろうと朝永は示唆しているのです。

「知っています」という知識至上主義は浅薄です。知識やスキルではなく、可能性としてのひとと私たちは対峙しているのであって、それは狭い因果関係ではなくそこに自分も入っている、関係しているという世界で展開されるべきです。

*このことは、終章の『脳科学からの接近』でも解説しています。